

戦後日本と小林勝

－「フォード・一九二七年」の場所の構成と戦争認識－

井上幸子*
sa2837@hanmail.net

＜目次＞

- | | |
|--------------|---------------------|
| 1. はじめに | 5. 再び訪れる朝鮮とスンギーとの再会 |
| 2. 中国済南という場所 | 6. 回想の二重構成と戦争認識 |
| 3. イメージの戦争と銃 | 7. おわりに |
| 4. 死人の顔と戦争認識 | |

主題語: 中国済南(Jinan)、植民地朝鮮(Colonial Korea)、銃(gun)、アジア太平洋戦争(Asia-Pacific War)、戦争認識(War recognition)

1. はじめに

「フォード・一九二七年」は1956年に小林勝によって『新日本文学』に発表された作品である。作家小林勝は、戦前日本が植民地化していた朝鮮で生まれ中学まで朝鮮で過ごし、陸軍予科士官学校に進学するため渡日、その後在学中に終戦をむかえたという経験を持った作家で、戦後の日本において朝鮮と日本について苦悩してきた作家である。彼は、1952年に「ある朝鮮人の話」(『人民文学』)という戦後の日本において強制送還される朝鮮人の男をモチーフにした作品でデビューし、それから約3年間は、戦後日本において繰り返された社会的闘争を背景に社会の底辺で生きる人々をモチーフにした作品を主に発表している。そして、1956年5月に植民地朝鮮を背景にした「フォード・一九二七年」を発表し、この作品ではじめてアジア・太平洋戦争に目を向けている。そしてこの作品から約2年間、植民地朝鮮を意識した作品を多く発表していくが、これらの小説は植民地朝鮮をテーマにしながらもそれにとどまらず、陸軍予科士官学校や復員をモチーフにするなど、アジア太平洋戦争を意識した作品となっている。このような小林勝の態度は明らかに1945年以降におけ

* 嶺南大学校 日語日文学科 博士課程

る日本の戦争認識がこの時期を境に変化していることを示している。

小林勝が「ある朝鮮人の話」を発表するまでの戦後の7年間は、共産党への入党、レッドパージ反対闘争への参加、大学の中退¹⁾、朝鮮戦争反対デモに参加²⁾、火焰臺事件の現行犯で逮捕されるという怒涛の年月であった。そして逮捕後収監された拘置所の中で、小林勝は自分自身の中の朝鮮のイメージを分析していく³⁾ようになるが、それはこの7年間に朝鮮を意識するようになったからである。「フォード・一九二七年」は小林勝の朝鮮のイメージがはじめて小説として描かれ、そのような意味において転換点になる重要な作品といえることができる。

「フォード・一九二七年」は、終戦をむかえ惨敗兵となった「ぼく」という人物が主人公である。小説は中国済南で引揚地に向かう途中に肺病のために倒れるところから始まり、主人公が中国済南にまで来ることになった過程を回想の形で描いている作品である。回想は1箇所ではなく、幼少期を過ごした朝鮮、大学進学のために来た東京、徴兵を前にして再訪した朝鮮と場所が移動しているのが特徴である。そして回想される各場所は、主人公の成長過程とリンクしながら、戦争認識の変移を表わしている。最初の回想場所である少年期の朝鮮では、植民者二世として朝鮮で生まれ育った主人公の戦争認識について描かれており、次の回想の場所の東京では、外国語大学に進学した主人公が、少年期に形成された戦争認識と戦争の現実の間で苦悩する姿が描かれている。そして徴兵を前に再訪した朝鮮では、植民地朝鮮の現実にも目を向け、最後は再び惨敗兵となった1945年敗戦後の中国の済南へ場所が移動する。このような場所の移動に注目した観点は、これまでの先行研究では見過ごされてきた部分である。

これまでの「フォード・一九二七年」に関する先行研究は、大きく2つに分けることができる。一つは、小林勝の故郷としての朝鮮という観点と、もう一つは植民地朝鮮における

1) 小林勝は敗戦後の翌年、旧制都立高等学校文科甲類に入学しているが、1948年共産党入党後、1949年に早稲田大学ロシア文学科(夜間)に転入している。レッド・パージ反対闘争で停学処分になった後、1951年に同大学を中退している。

2) 小林勝(1959.6)「体の底のイメージ」新日本文学、p.81

「私は、朝鮮人と相対した場合、痛みとひきめを常に感ずる。常に、である。植民地は消滅し、あの歴史は終わったが、それは日本人の一人一人の心の中ではまだ終わっていないのだ。あの歴史に対して、真正面からこたえていないのだ。日本人の一人として、そのことに痛みをおぼえる。あの朝鮮戦争の時、私のこの痛みは私の胸を裂いた。あの歴史に対して、何ほどのつぐないもしていないうちに戦争がおこったのである。」

3) 同上、p.81

「そして私は、小説らしいものを、小菅の拘置所の中で書き出していた。私は自分の中の朝鮮のイメージを少しずつ、とり出し、分析していこうと思っていた。」

朝鮮人と日本人の関係性に注目したものである。まず、磯貝治良が主張する〈内なる原風景〉⁴⁾を中心としたものについてであるが、この論文では、小林勝の初期の作品と植民地朝鮮について注目している。後期の作品につれて「〈戦後責任〉の自己追求」が強くなっていくのに対し、初期の作品では植民地朝鮮の風景を細かく描写しており、それは小林勝の〈内なる原風景〉を表現しているものであるというものである⁵⁾。崔俊鎬は「フォード・一九二七年」について「最後の場面で、主人公の日本人兵士は自分の死を予感し、植民地朝鮮での上記のような思い出を古き良き時代であったと懐かしんでいる心理が読み取れる」⁶⁾とされており、李元熙も〈原風景・原体験〉について、日本人である小林の故郷としての朝鮮のイメージであるとし、これが小林勝にとって死ぬまで彼の意識の中に潜在すると分析している⁷⁾。

次に、植民地朝鮮における朝鮮人と日本人の関係性についてであるが、原裕介は植民地朝鮮における二重言語の観点から、支配者と被支配者との関係を考察している⁸⁾。また、崔俊鎬は「フォード・一九二七年」に現れる主人公の意識について「失われた故郷へのノスタルジアと植民地朝鮮出の少数者としての日本人植民者が置かれている立場と、それに起因する部外者としての孤独感である」⁹⁾と分析している。

これらの論文はいずれも植民地朝鮮における少年のぼくの記憶である小説の一部分を取り出して論じているものであり、小林勝が少年期まで過ごした朝鮮のイメージを分析しているものである。一方でこの小説の全体を本格的に検討している論文として、吳美姫の「小林勝の『フォード・一九二七年』論」¹⁰⁾を挙げることができる。この論文では小説の「回想」の構造を分析、「回想」のもたらす効果について考察なされており「過去の記憶を回想する過程が植民地的構造に対する本質的な理解と反省をもたらししている」という「回想」によって得られた効果や支配者と被支配者の関係を考察している¹¹⁾。

本論文では、これらの先行研究を踏まえて敗戦直後の中国済南で小説が始まっているこ

4) 貝治良(1982)「原風景としての朝鮮—小林勝の前期作品」『季刊三千里春号』第29号、三千里社、pp.207-217

5) 磯貝治良(1982) 前掲書、p.208

6) 崔俊鎬(2012)「小林勝『無名の旗手たち』論」『日本語文学』第58号、韓国日本語文学会、p.284

7) 李元熙(2001)「小林勝文学に現われる植民地朝鮮」原文「고바야시 마사루 문학에 나타난 식민지 조선」『日語日文学研究』第38号、韓国日語日文学会、p.217

8) 原祐介(2014)「コメント(3):日本人植民者の戦後文学における二重言語空間」『立命館言語文化研究所』25巻2号、立命館大学、pp.161-162

9) 崔俊鎬(2014)「戦後文学と植民地記憶」『日本語文学』第61号、韓国日本語文学会、p.356

10) 吳美姫(2011)「小林勝の『フォード・1927年』論-仲介の可能性-」原文「고바야시 마사루의 『포드:1927년』론 -중개는 가능한가?」『日語日文学研究』第78号、韓国日語日文学会

11) 同上 p.332

とを第一に注目し、場所的意味について考察していく。先行研究では、小説のある一部分、特に少年期の植民地朝鮮についての考察がほとんどで、その他の東京、再訪した朝鮮、ましては済南についてはほとんど考察がなされていない。吳論文においては済南から始まる回想の構造は、植民地争奪戦争を自覚した「私」が済南から回想するという設定で、自覚した「私」が回想することにより、少年期には分からなかった植民地の姿を浮びあがらせているとし、少年期に同じ村にいたトルコ人に焦点を当て、支配者である日本人と被支配者である朝鮮人との仲介者として可能な存在であったのかを考察している¹²⁾。本稿は、植民地争奪戦争を自覚した「私」から出発するのではなく、その前段階である自覚するまでの過程について注目し、その方法論として場所を選択した。すると場所の移動は「私」の成長過程という単なる体験談ではなく、明らかに戦争に対する認識を変化させていることが見えてきた。各場所が「私」の戦争認識の形成にどのようにかかわりあるのかを検討し、さらに戦後日本におけるこの小説の意味を考えていきたい。

2. 中国済南という場所

この小説は、これまで主に朝鮮における経験・記憶という観点から論じられてきた作品である。しかし、実は導入部は中国の済南で始まり、結末もまた済南で終わっているのである。そして、済南は小説の時間軸では現在に当り、朝鮮における経験・記憶の中心は済南からの回想なのである。小説の時間軸の中心に位置する済南には何かしらの意図があるはずである。この章では、多くの中国の都市がある中で回想の場所をなぜ済南にしたのかを考察していく。

済南は中国山東省にある都市であり、膠済鉄道と津浦鉄道という2つの主要路線が交差する場所で、中国にとって交通・政治上の中心地であった¹³⁾。それゆえに、1945年前には日本人居留民も多くいた場所でもある。

実は、交通の要所であった済南という場所は、この小説と関連しては、済南事件の舞台なのである。そしてこの事件は、のちの15年戦争の導火線になったとされている事件なのである。

12) 同上 p.320、p.328

13) 溝部竜(1998)「第一次山東派兵における出兵決定過程-陸軍省部と外務省の対応を中心として-」『防衛研究所戦史部年報』(1)、防衛研究所戦史部、p.22

1928年に起こった済南事件とは、日本人の居留民の保護を名目に派遣された日本軍と国民革命軍との間に勃発したはじめての軍事衝突である。一般には1931年の満州事変から15年戦争が始まったとされるが、実はこの済南事件がこの導火線になったといわれている。その理由は、この事件が中国の主権を侵害するものであったことや、政府の方針に対して陸軍が対立し独走するようになったこと、そしてその結果、満州事変が起こり、満州事変は日中戦争へと、日中戦争はアジア太平洋戦争へとつながっていったからである¹⁴⁾。

これらは吳論文でも言及されている¹⁵⁾が、以上のような済南という場所とそこで起きた済南事件について調べた内容に照らし合わせてみると、小説が中国の済南という場所からはじまるということは非常に重要なことであるといえる。

それでは、小説の中で済南はどのように描かれているのか、それは済南という場所で〈回想〉していること、〈回想〉は引揚げ「兵士」の視点から行われていることである。この引揚げ「兵士」が小説の主人公であり、彼が〈回想〉しなければならない理由とは、彼がおかれている状況が大きく関連している。

部隊はもう引揚地めざして出発してしまっていた、そして済南近くの、荒れ果てた丘の上にある民家の土間にアンペラをひいて、ぼくと彼が寝ころがっていた。ぼくは二等兵だった。そして山奥からようやくここまで歩いて来て、倒れてしまった肺病やみだった。彼はぼくのつきそいであり、衛生兵の上等兵だった。彼が寝ているのは、体を痛めているわけではなく、ほかに何もすることがないからだった。

ぼくは彼に背をむけた、ぼくの眼の前には土の壁がたっていた。そして視線をそろそろとあげて行くと、四角い小さな窓がぼっかりとあいていた、その窓のむこうに、真青な空があった。

—この大陸と地続きの遙か遠い空の下に……とぼくは口の中でつぶやいた。すると思わず、乾いた笑いがこみあげてきた。¹⁶⁾

主人公は中国戦線から引揚げてくる部隊の一員で、おそらく鉄道を利用して引揚地の青

14) 伊香俊哉(2007)『戦争の日本史22 満州事変から日中全面戦争へ』吉川弘文館、pp.3-7

15) 吳美姫(2011) 前論文、p.318

「1928년 일본군은 자국민을 보호한다는 명목 하에 ‘지난사변’을 일으켜 장개석군대와 대치하였다. 분쟁이 끊이지 않던 지난은 1937년에서 1945년 동안 일본에 점령되어 있었다.(1928年日本軍は自国民を保護するという名目で「済南事件」を起こし、蒋介石軍と対峙した。紛争が終わらなかった済南は1938年から1945年の間日本に占領された)」(訳は引用者による)

16) 小林勝(1975)『小林勝全集 第一巻』白川書院、pp.7-8

島に向うために済南を経由したものと考えられる。済南を含む山東省は、中国同様、日本にとっても商業的・軍事的に重要な地域であり、鉄道は中国戦線には必要不可欠のものとして位置づけられ、特に膠済鉄道は済南事件時には、済南から青島への日本人居留民の避難や、済南へ兵士を送るために利用されてきた¹⁷⁾。敗戦後は引揚げるためにその鉄道を利用し、主人公はこの汽車に乗る前に倒れてしまったのである。この列車に乗れば日本への帰国ができたであろう主人公は、その直前で列車に乗ることができなかった。乗ることができなかったのは病気のためであるが、それは外的な要因に過ぎない。内的な要因は、主人公が15年戦争と共に生きてきた「私」であり、惨敗兵の「私」という現実であり、15年戦争の結果物としての「私」という中に含まれる戦争認識に起因するのである。

「私」が生まれた年は1927年前後であると考えられ、まさに15年戦争が始まる導火線となった済南事件が起こった年である。小説の最後で「もう一週間もすれば後にいる健康な男は出発していこう、ぼくの指の骨を彼の胸のポケットにほうりこんで」¹⁸⁾とつぶやき、日本へは帰れないこと、済南で死ぬであろうことを自覚している。倒れた場所が済南であることを意識すると、戦争に参加した主人公が15年戦争の最後の時に15年戦争が始まった土地で死ぬことは、その人生は常に15年戦争があり、戦争と共に生きた人間という人物像が見えてくる。それだけではなく主人公が死を覚悟するのも自分がこの土地で死ななければならぬ理由について受容し、戦争認識を完成した主人公の内面があるのである。

これらをふまえると、主人公にとっての済南とは引揚げ途中の一時的な場所ではなく、実は15年戦争の連続として植民地朝鮮から一線上に存在している場所といえるのである。済南から〈回想〉するのは、15年戦争、つまり、済南事件、日中戦争、アジア・太平洋戦争という歴史の一線上に、主人公が過ごした植民地朝鮮も東京も存在しているからであり、戦争と平行しながら主人公が場所の移動を通して戦争認識を作り上げているのである。

主人公の戦争認識の出発点は、最初の〈回想〉の場所、少年期を過ごした1930年代の植民地朝鮮である。少年期の朝鮮へ回想に入る部分を見てみると、済南と朝鮮は地理的に「地続き」であることが強調されており、空間は異にしている同じ大陸上に存在していることを、まるで歩いて行けば、そこに到着するかのような空間として描かれている。少年期の植民地朝鮮に回想に入っていくとき「乾いた笑いがこみあげてきた」のは、懐かしさと同時に、主人公の人生の中で一番自由で幸福な時期を過ごした場所だからである。それではどのように戦争認識が形成されているのかを具体的に考察することにする。

17) 溝部竜(1998) 前論文、p.22

18) 小林勝(1975) 前掲書、p.32

3. イメージの戦争と銃

これまで少年期の植民地朝鮮は、トルコ人の家での出来事について、「言葉、疎外、支配・被支配関係の転倒¹⁹⁾」のような観点から論じられてきた。しかし、場所を移動しながら主人公の戦争認識を形成していることに注目すると、植民地朝鮮は主人公にとって15年戦争を体験する最初の場所といえる。植民地朝鮮は時間をずらして2回でてくるが、最初の〈回想〉場所である植民地朝鮮の特徴は、1930年代という時代背景と主人公が少年であることである。他者(外部)からの刺激により自我を形成していく時期において、少年期の主人公の戦争認識はどのようにつくられていったのか、特にメディアを通してイメージされた戦争認識について具体的に考察していくことにする。

少年期の戦争認識の特徴は、戦争そのものを経験したのではないため、イメージを通して形成されたものである。そのイメージの中心にあるのは、雑誌というメディアである。

雑誌のどのページからも、硝煙のにおいがたちのぼっていた、この町と地続きの、しかし遙か遠いところで戦争が起こっていた、雑誌の中の絵も文字もそれをぼくに告げていた、ぼくは覚えたばかりの歌をじだらくな調子で口ずさんだ、

朝に一城おとしいれ

夕二城をほふり去り……

それからぼくは、ゆっくりとあくびをしてみせた(スンギーに対してた)、便所へでも行くような調子で立ち上がった、

19) 原祐介(2014)、前論文、pp.161-162

この論文では、「日本人のものだと思い込んでいた朝鮮に、支配者である自分が参入できないコミュニケーション領域が存在し、自分と同じ「外国人」である「トルコ人」が自由にその領域にアクセスしており、それに対して主人公は「自尊心を傷つけられて苛立つ」のであるが、「トルコ人」を外国人扱いしていた自分たち日本人もまた、実は朝鮮においてまぎれもない外国人であるという重大な事実を、朝鮮語世界のためだけに放りこまれた少年は突きつけられ」と分析している。

崔俊鎭(2011)「고마야시 마사루의 식민지 조선 인식」『日本語文学』第48号、韓国日本語文学会、pp.148-149

この論文では、トルコ人と日本人と朝鮮人の子供が対面する場面について「日本人 식민자의 조선인에 대한 차별과 터키인에 대한 차별과 터키인에 대한 시기가 교차되는 장소(日本人植民者の朝鮮人に対する差別とトルコ人に対する猜忌が交差する場所)」であると「지금까지 당연시 해오던 커뮤니케이션 도구로서의 일본어가 무용지물로 전락하고 대신에 차별하던 조선어를 ‘나’ 스스로 구사할 수밖에 없는(今まで当たり前だったコミュニケーションツールとしての日本語が無用のものとして転落し代わりに朝鮮語を使わなければならない)」ことで、「‘나’는 자신이 식민지 조선의 이방인에 불구하며 영원히 외부인 일 수밖에 없다(「ぼく」自身が植民地朝鮮の異邦人にすぎず、永遠に外部人になるしかない)」と分析している。(訳は引用者による)

駿足疾風のゆく如く
シナ四百州をなびかせぬ…… 20)

「地続きの遙か遠いところ」とは主人公が歌っている内容から中国をしめしており、時期的には主人公が小学校5年生、1937・8年頃である。1937年といえば、日中戦争が始まった時期で、日本が本格的に中国へ侵攻していく時期である。日本国内だけでなく植民地朝鮮においてもその波は確実に襲ってきており、小学生の主人公は直接戦争に行くことはなくても、学校教育と雑誌を媒介として、確実に戦争認識を形成していつている。その戦争認識とは憧憬である。

では、小学生の主人公がどのようにして戦争に対する憧憬を作り出していったのであろうか。そこには巧妙にしかけられたメディアの役割がある。そのメディアは主人公にとっては雑誌であり、しかも日本国内で発刊されている雑誌である。当時、植民地朝鮮にも日本の雑誌が輸入されており²¹⁾、主人公の年齢を考慮するとその雑誌は『少年倶楽部』と考えられる。

『少年倶楽部』は1914年の発行以来、多くの少年たちに支持されてきた雑誌である。内田雅克によると『少年倶楽部』は、国民としての「少年」の形成に大きな影響力を持っており、『少年倶楽部』の独特のアプローチとして、教育的効果、知育に傾きがちな学校教育を補完すべく、国民性の啓発や精神教育の方面を担っていた²²⁾雑誌であるといっている。政府の方針と矛盾しない統一された精神教育を雑誌という娯楽を通して主人公は受けていたのである。さらに内田は『少年倶楽部』に出てくる軍人の数について分析²³⁾をしており、それを見ると、1931年以降、軍人の登場数が徐々に増えはじめ、1937年以降はその増加が顕著になっている。このような視覚的効果は、小説の主人公に軍人に対する尊敬や憧憬与え、さらには戦争に対する正当性をも構築させていったのである。

このように主人公の戦争認識は、雑誌に登場する軍人の姿を通してつくられ、正しいものとされたのである。そして、主人公にとって憧れの軍人の象徴が小説に登場するが、それがまさに〈銃〉なのである。

20) 小林勝(1975) 前掲書、p.17

21) 千政煥(2001)「1939、植民地朝鮮における読書一日帝末期の読書文化と近代的大衆読者の再構成(I)」『研究紀要』81、日本大学文学部人文科学研究科、p.37

22) 内田雅克(2010)『大日本帝国の「少年」と「男性性」-少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」-』明石書店、p.117

23) 内田雅克(2010) 同書、p.119

かつてぼくは彼女の眼をぬすんで銃をかかえたことがあった。スンギーがおどすように手をあげて近寄って来ると、ぼくは銃をかついで家じゅうを走り廻った、すると追いかけるのをやめて立ちどまったスンギーの眼もとが、ぼつと赤らむと思いがけなく涙がうかんだ。彼女は長いおさげの先をしばっている赤い布を歯でかんだ、そしてすり合わせた歯の間から、嘆願するような、こんな言葉が出てきた。

—おくさん、あたしをやめさせます。

それ以後ぼくはスンギーの前で銃に決してさわったことはなかった。

しかし、その日は、遠いところでおこっている戦争がぼくを無性に興奮させていた。ぼくは床の間に近づき、銃を手にとった、チビのぼくには、それは途方もなく重かった。ぼくはそれをやったのことでささえ、ふすまをねらう真似をした、24)

スンギーというのは、主人公の家で働く女中の朝鮮人である。家の中に存在する〈銃〉は父親の猟銃で、主人公がそれに触ることを両親から絶対的に禁止され、両親がいない間はスンギーが触らないように監視していた。両親が銃に触ることを禁じているのは、銃が人を殺す道具だからであるが、主人公には人を殺すという概念がない。むしろ銃に対する好奇心だけが先走っている。

主人公が家の銃に触るのは3回で、1度目は母親の前で、2度目は低学年時に、3度目は、小学校5年生になった現在である。小学校5年生の主人公は雑誌でみる憧憬の対象である軍人がある場所が、自分がいる場所と「地続き」の場所であることを認識している。そして同じ大陸いるという興奮は本物をもつことで彼らのようになれるかのような錯覚を起こし、銃に触るという危険な行動へと向かっていく。おもちゃとは違う重圧感のある本物の〈銃〉に触ることに恐怖は見られず、むしろ、触ることによって得られる興奮の方が上回っている。〈銃〉は、「地続き」の場所にいる兵士たちと自分を同化させる役割をするのである。

そしてこの行動は、自己の欲求を満足させるためだけに収まらず、〈銃〉はスンギーに対しても向けられる。

スンギーの顔へ銃口は真直ぐに向いていた、顔はみるみるうちに青くなり、そして白くなった。すると不意に気違いじみた嬉しさが、ぼくの体を熱くした。

—うってやる、とぼくは言った、勿論、冗談だった。

—さあ、やるか、やるか。

ぼくは、おやじがいつも弾丸を抜いておくのを知っていた。だから、安心して引き金に指をかけた。嬉しさを抑えきれずにぼくは笑い声をたてた、ぼくは脅すように引金をひいてみせた、そして、また叫んだ。

—こわくないか、スンギー、こわいだろう。25)

スンギーは、主人公が銃をもっていることを目撃し驚愕する。その理由は、銃口が自分に向けられたからでもあるが、それ以上にスンギーにとっては雇い主である主人公の両親に絶対に触らしてはならないと言われていた〈銃〉を主人公が構えていたからである。もし、主人公が〈銃〉を触ったことが知れたら、スンギーは女中をやめなければならぬ。それは収入の断絶を意味するもので、スンギーにとっては死活問題であった。スンギーの前で最初に銃を持ったときはスンギーが哀願する姿を見て銃を触ることをやめているが、それは主人公の内面に日本人と朝鮮人という主従関係が完全に成立していなかったからだと考えられる。しかし今回は銃を持つだけにとどまらずスンギーに対して銃口を向け引き金をひいており、この行動は主人公が日本人と朝鮮人の主従関係をはっきり認識していることを示している。少年の主人公から銃を取り上げることが可能であるにもかかわらず、銃口の前にスンギーは身動きができないのは、主人公の内面に日本人が朝鮮人を支配しているという認識が確立しているためであり、その認識の前にスンギーは被支配者としての自分を自覚し、支配者が子供であったとしても逃げることができないのである。

スンギーに銃口を向けたのは故意的ではなかったとしても、偶然に生じたシチュエーションが「地続き」の中国で、憧れの軍人たちが中国人に対して銃を向けるという行動と同じ構図を作り出した。強者が弱者を武器で制圧する行動は、主人公に今まで経験したことのない快感を与えただけでなく、主人公の絶対的な支配認識を具体化した事件となる。日本人の朝鮮人に対する支配意識が、幼い主人公の中にも根付いていたことを示しているといえる。

主人公は雑誌からの情報を〈銃〉を使って具体化し「地続き」の中国で戦っている日本兵の疑似体験をすることに成功した。それだけでなく、朝鮮人に対する支配者としての自分を自覚することにも成功した。このような過程を経て、主人公は、国策に沿った戦争認識を形成していき、これだけにとどまらず、植民地朝鮮という場所においてイメージされた強い日本は、主人公に支配者としての日本人像をも作りあげていった。このあやまった戦争認識は、植民地認識にも影響を与え、東京に行くまでそれをずっと持ち続けることになるのである。

25) 小林勝(1975) 前掲書、p.18

4. 死人の顔と戦争認識

回想の場所は、1941年以降の日本へと移動する。この場所は、これまでの先行研究ではほとんどふれられてこなかった場面²⁶⁾である。しかし東京は、主人公が朝鮮でイメージした戦争を限定的に実体化する重要な場所として描かれているのである。この章では戦争への憧憬が実体へと変化する過程に注目し、東京での主人公がどのようにして戦争認識を具体化していったのかを考察していくことにする。

まず、主人公にとっての大きな変化は、朝鮮でイメージした戦争が目の前にあらわれることにより、限定的ではあるが戦争を実体化させたことである。

遠いところでやられていた戦争は名前も大東亜戦争とあらためられて、東京の空にまでやって来ていた、何年か前に、この眼でみたいものだとか空想していた空中戦は、連日のようにぼくの頭の上で展開されていた。空想していたものとは、それはずいぶん違って、沢山の日本の飛行機が煙をはいて落ちるのだった。文科系の学生の徴兵延期はすでになかった、ぼくは授業のかわりに疎開作業ばかりやる学校へ行くのが嫌だった、ぼくは学校と下宿の小母さんの両方に嘘をついて、毎日、上野の図書館まで行って本を読んだ²⁷⁾

これまでの主人公にとっての戦争とは、空間を異にして行なわれていたもので、それゆえに雑誌を通して伝えられる戦争をそのまま自由にイメージし美化することが容易であった。しかし東京に来たことで、戦争が主人公の生活空間へと侵入してきたのである。そしてこの侵入は、それまでの戦争認識を崩壊していくのである。

長引く日中戦争と、国民総動員法による戦時下体制は、主人公を含め国民全体に犠牲を強要した。主人公にいたっては「徴兵」という現実が目の前に現れることでさらに戦争を具体化させることになった。戦争と隣り合わせになった主人公は、現実を従順に受容することができず、積極的に戦争に協力しないばかりか、現実逃避する心理もうかがえる。主人公にとっての東京は、個は無視され国のために自らを犠牲にすることが美化された場所で、同時に、それに反する者は非国民といわれる場所だった。この環境で主人公は朝鮮で形成した戦争認識の喪失に苦しめられ、現実の戦争と内面の葛藤は主人公を内向的にさせていく。その中でしだいに主人公は戦争という現実には追い詰められていくのである。

26) 前掲した呉美姫(2011)論文のp.324に東京の考察があるのみである。

27) 小林勝(1975) 前掲書、pp.26-27

実際に1943年頃には、日本の敗戦色はしだいに強くなっていた。東京での空中戦で日本の飛行機が次々に打ち落とされていたが、外地においても日本の軍隊が大打撃を受けており、そのような情報を大学生である主人公が知らなかったとは言いがたい。それにもかかわらず、軍部中心の政府が闇雲な戦争を続け、敗戦を意識しながらも主人公は徴兵により戦争の一部に取り込まれ、国という権力からは逃げるできない。

権力による支配という新しい戦争認識を自覚していくほどに、主人公は希望を喪失し、無気力に陥っていく。しかし、この戦争認識に変化を起こすのが、一枚のポスターとの出会いである。

ぼくの眼は、単なる二つの穴に過ぎなかった、それは家や塀や人々をうつしてはいた、がしかし、ぼくは何物をも見ていなかった。(中略)古びた塀に一枚の紙っぺらがはってあった(中略)それはどうやら人の顔の形をしているらしかった。(中略)同様に眼の玉も、鉛色に光り、全く艶がなく、生命の如何なるひとかけらも宿していなかった、その顔は(もし顔だ、とするならば)その内側から、いや裏側からのぞいたひそかな真実の顔かもしれなかった。(中略)一死人の顔のカリカチュアだな、とぼくは、つぶやいた、そして一歩ふみ出したとたんに、息を一瞬つまらせた程驚いたのである。

ひかりの不気味な反射は、消えていた。色は、それぞれ本来の色彩をとりもどしていた、そしてそこには飛行帽をかぶった、ぼくと同年輩の若鷲の一人がじっと大空をにらんでいるのだった。(中略)若鷲の眼は空の一点にむけられて、きらきら光っていた²⁸⁾

このポスターは国民の戦意昂揚を目的とした映画のポスターである。主人公にはこのポスターに描かれている顔が生きるための活力をすべて抜かれた「死人の顔」に見え、立ち止まった。この主人公の行動はまさに主人公の現在の内面とこのポスターが相対することをしめしている。つまり、主人公の内面を投影したものがこのポスターなのである。

そしてこのポスターは一転して違う姿を主人公に見せつける。それは若鷲のような特攻隊の青年が、国のために特攻隊員となり戦闘機に乗ることを名誉なこととして描かれている姿である。これもまた、「死人の顔」同様、主人公の姿である。しかもそれは内面ではなく、何ヵ月後かの現実としての姿である。表裏一体の若鷲のポスターは、現実の主人公の姿そのものなのである。

主人公が徴兵される時期は迫ってきており、主人公は戦争へ行くための覚悟をしなけれ

28) 小林勝(1975) 前掲書、p.27

ばならない。限定的に現実化された戦争を経験した主人公の内面には、すでに権力による支配という新しく作りあげられた戦争認識が存在していた。しかしそれは自己中心的な戦争認識で、戦争による被害者の自分という認識の枠を越えていない。

しかし、このポスターによって主人公は戦争認識のターニングポイントをむかえることになる。「死人の顔」と「若鷲の特攻隊員」という2つの顔を持ったポスターは、主人公に見方を変えることで見えることがあることを気付かさせるのである。

翌る朝、下宿の台所でぼくは、不意に台所の壁が、斜めに倒れかかってきたのを見た、しばらくしてぼくは体がぐっともちあげられたのを感じた。誰か、女が二人でぼくを運び、ねかしつけてくれたのだった、女の手は二人とも柔らかかった。夕方になると、別の女が大豆まじりのお粥を煮てくれた。朝になると、これまた違った女が味噌汁をつくってくれた、一女ばかりしかいないんだ、東京は女ばかり—ぼくは鼻唄のようにそれを、夢うつつの中でくりかえしていた。²⁹⁾

それまで個人の域を越えることがなかった主人公の葛藤が、しだいに外へと向けられる場面である。その第一は、主人公をとりまく環境である。ポスターを見た翌日に倒れてしまった主人公は、東京には女しかいないという事実を目を向ける。戦争も末期に近づいているこの時、女しかいないことは日本の男たちが徴兵されてしまったことをあらわしている。いなくなった男たちは、近い将来の自分の姿である。主人公は倒れる前は国に裏切られ支配され続ける人間は自分だけであるかのような絶望感に襲われていた。しかし主人公がすでにいる男たちと自分の姿を重ねることで、彼等が若鷲のポスターの青年のように、自分の感情を押し殺して表面では笑って戦地に向かった男たちだったことに気付いたのである。そして他者へ向けられた視線は、さらに東京から少年期を過ごした植民地朝鮮へとむけられる。

—死人の顔の……

ぼくは自分の言葉を半分ほど思い出した、しめっばい、重い予感が部屋の中にはいり込んで来ていた。

—つまり、ぼくは、何事をも表からだけ見ていたというわけだな、ちょっと見かたを変えると、何もかもが、すっかり変ってしまうかもしれないな、とぼくは思った。そこで、ぼくは声に出して喋ってみた。

29) 小林勝(1975) 前掲書、p.28

—このまま、兵隊にとられるのは……

すと言葉は、途切れた、ぼくは次に来る言葉を闇の中を探した、しかし、ほんとうはもう、探す必要はなかった、ぼくにはわかっていた。

翌日、切符の申告で、ぼくは長い列の中に辛抱よく立っていた。

幾日か後、ぼくは連絡船で、青い海を渡っていた。³⁰⁾

倒れた主人公は夜中に目を覚まして、若鷺のポスターを思い出す。戦争に対して葛藤しているのが自分だけではないという自覚は、ついに植民地朝鮮に対しても向けられた。では、主人公はなぜ植民地朝鮮へ再び目をむけるのであろうか。それは、朝鮮において日本人が朝鮮人に対して行なってきたことに対する正当性に対する疑問である。少年の主人公に限定すれば、先ほどのスンギーに対した行動に代表される朝鮮人に向けられた支配的な意識問題である。

主人公が少年期の朝鮮で雑誌を通してイメージされた戦争認識は、中国戦線で戦う軍人の姿を同化でつくられた、強い日本を認識するものであった。イメージの中の戦争は正当性をもったものであり、戦争はカッコいいものだった。朝鮮人に対しても同様で、主人公は植民者1世から受け継がれてきた意識、つまり朝鮮人を蔑視し支配的な意識を持つことは当然のこととして受容してきた。しかし、権力による支配という戦争認識を自覚したとき、主人公は日本の植民地支配も現実には権力によって支配していたものではないのだろうかという疑問を持ちはじめたのである。主人公が現在、国の権力の前に逆らうことができないように、朝鮮人も今の自分と同様であったのではないかという疑問が、主人公を再び朝鮮へ行くことを決意させたのである。このまま徴兵されれば体が弱い主人公は生きて帰ることは皆無に等しい。そうなれば二度と朝鮮に行くことができず、植民地朝鮮の真実は主人公にとって闇に葬られてしまうのである。

5. 再び訪れる朝鮮とスンギーとの再会

主人公は、約10年ぶりに少年期に育った町を訪れる。この場面も、東京同様、あまり注目を浴びてこなかった場面である。しかし、済南から朝鮮-東京-朝鮮と、回想の一線上にあるこの場所は、東京で意識した植民地認識が具体化する重要な場所である。

30) 小林勝(1975) 前掲書、p.28

再訪した朝鮮は、記憶の中の朝鮮とは全く正反対の姿として主人公の前に現れる。

ぼくは眼をつぶる、すると、広々とした公園が浮びあがる。東京堂やニュー・イサハヤに人々がにぎやかに出入りしているのが見える、どこか遠いところで戦争が……ぼくは眼をあける、狭くしい空地、人影のないガランとした、つぶれそうな家々、雲が重くためこめた暗い空、そしてぼくの肩には、おやじから借りたベルギー製五連発猟銃さえのっかっていた。31)

主人公の記憶の中の朝鮮が「明」と表現するならば、再び訪れた朝鮮は「暗」と表現できる。この風景によって表現された明暗の認識が、まさに主人公の植民地認識の変化である。植民地朝鮮の「暗」の部分の認識をしたとき、東京では限定的だった戦争認識がしだいに現実化していく。東京で経験した支配による戦争認識が、植民地朝鮮に来ることによって加害者としての自分自身を自覚したのである。

青年になった主人公はベルギー製の五連発猟銃をもって少年期を過ごした町へ訪れる。軽々と主人公の肩にかけられ、触ることを許可された銃は、主人公が青年になったことを表わしており、少年期と青年期の時間を媒介する役割をしているのである。少年期には尊敬していた兵士たちの象徴として憧れの対象の銃であったが、徴兵を直前に控えた主人公にとっては、銃は人を支配するための武器となってしまったと同時に、植民地朝鮮における支配を象徴するものとなってしまった。

遙かに昔、この山奥へ最初はカーキー色の軍服を着た兵隊がやってきた、それは独立歩兵大隊だった、その付近を中心にして起こった暴動が兵隊の銃剣でつぶされてしまってから何年かたった。すると警察がやってきた、商人がやって来た、銀行の支店がやってきた、金貸しがやってきた、裁判所がやってきた、学校の先生がやってきた。町の朝鮮人が日本語を覚えた、そして兵隊はもういらなくなったので、居なくなった。32)

これは主人公が住んでいた朝鮮の町の支配が、武器によって始まったことを描いている。日本人がこの町にはじめてきたのは3・1独立運動のときで、銃で朝鮮人たちを制圧していった。それだけでなく武器による制圧は、肉体的な犠牲だけではなく、のちに言葉を奪い、名前を奪い、精神的な被害を多く与えていくことになった。しかし、武力による制圧が、植民地朝鮮において平和をもたらしたのであろうか。結果は否である。確かに少年期

31) 小林勝(1975) 前掲書、p.29

32) 小林勝(1975) 前掲書、p.12

の主人公にとっての朝鮮は平和そのものであった。強くて憧れの兵隊たちが銃をもって朝鮮を制圧したことは、主人公に日本の植民地支配の正当性を認識させるものであった。しかし再訪した朝鮮は、主人公にかつての少年期と同じ姿では現われなかった。見方を変える、つまりは抑圧されている立場から植民地朝鮮を見つめることで主人公は被支配者として生きなければならなかったの朝鮮の真の姿を見ることができるようになったのである。

さらにこの意識が具体化するための重要な人物がいる。以前、主人公の家で女中として働いていたスンギーとの再会である。

—スンギーは居ませんかぬ。

(中略)

女は、ぼくの長細い、青白い顔の中に、小学校五年生の少年を見出すことは困難なようであった、が、ベルギー製五連発猟銃が、スンギーに記憶をよび戻したのだった。そしてぼくは、スンギーの家の縁側に腰かけスンギーと話したのだ、スンギーの眼はいっそう細くひきつり、もう疲労をあらわす皺が広いひたいに、うっすらと刻まれていた。彼女の胸は驚くほど薄くなっていた、何かスンギーから青春を永久にうばい去ったことは事実だった、そして、その何かは、スンギーから青春をうばっただけではなかった。³³⁾

主人公は、この町に到着するとスンギーを探すことから始める。少年期、朝鮮にいなながらも朝鮮人との関わりを極力さけていた主人公にとって、スンギーは断絶された朝鮮人社会との唯一の接点であった。日本人に支配されていた朝鮮を自覚した主人公は、彼の一番身近だった朝鮮人にその真実を求めたのである。しかし、主人公はスンギーをすぐに認識するが、スンギーは主人公が抱えている銃を見てはじめて主人公を認識するのである。ここでも銃は過去と現在をつなぐ媒介として利用される。

主人公の記憶の中にあるスンギーは、小柄ではあるがふくよかな女性であった。しかし、再会したスンギーは生活に困窮したやつれた女性として目の前にあらわれた。彼女が子供と一緒に実家にいるということは、結婚しているはずであるが、スンギーの夫となる人物の姿は見られない。朝鮮でも東京と同様男の影が見られないのである。

夫に対する直接的な叙述はないが、当時の男性たちが貧困のため日本へ出稼ぎにいたり、強制的に徴収され日本に行ったりした事実をみると、おそらく、彼女の夫も労働のために日本へ行ったのではないかと考えられる。それが強制労働なのか、自ら選択していつ

33) 小林勝(1975) 前掲書、p.29

たのかは分からない。しかし、朝鮮の男たちが町からいなくないのは、明らかに日本の植民地支配に原因がある。

スンギーの姿は日本による植民地支配の結果をあらわしている。戦争認識が実体化したことで、主人公はスンギーを通して日本の植民地支配による被害を直視した。それは自分と同様、国という大きな権力の前に飲み込まれてしまった朝鮮人の姿であった。しかし、スンギーと主人公が違うのは、朝鮮を支配していた当事者は<銃>をもって侵略してきた日本人であり、その中には主人公も含まれていることであった。

限定的だった戦争認識は朝鮮で植民地支配を自覚したことで具体化した。東京では自分は国から自由を奪われた被害者であるという認識が、植民地朝鮮に再訪したことで、戦争の被害者は実は朝鮮人たちであったことを認識した。そして、それを強いたのは日本人であり自分自身であったことを自覚したとき、主人公の戦争認識は、日本と個人(主人公自身)の関係から主人公と植民地朝鮮という関係に変化していったのである。

主人公はこの後、徴兵され、中国戦線へと送りだされた。そして、徴兵され中国の済南にまで来る過程を通して、主人公の戦争認識は完成されていくことになるのである。

6. 回想の二重構成と戦争認識

主人公は、朝鮮から日本に戻ったあと、徴兵され中国へ行くことになった。幼少期に憧れていた兵士たちが戦っていた場所である。中国で敗戦をむかえた主人公は、1945年現在、済南まで歩いてきて、自分が済南で死ぬであろうことを覚悟している。

死を目の前にした主人公が最後に次のような告白をする。

—トルコ人を町から追い出したんだ、
とぼくは弱々しくつぶやいた、すると、まるでその言葉をまっていたように猪のように太いくびをした上等兵は、ぼくの背中へ浴びせかけた。
—なに、畜生、トルコ人や日本人がいなくなったって、みんな結構うまくやってくさ、ぼくは黙って彼に背をむけていた、それは多分、真実なのだ、そしてぼくの気付きようはあまりにも遅かったのだ。³⁴⁾

34) 小林勝(1975) 前掲書、p.32

トルコ人とは、少年期の植民地朝鮮において主人公の町に來た日本人とは別の入植者である。トルコ人は朝鮮人と親しく交流をもち、それが原因で日本人とトルコ人は断絶した関係を作っていくのであるが、トルコ人は少年の主人公に親しく話しかけ、彼が所有の車(フォード)に乗ってドライブに行こうと誘うのである。しかしそこに朝鮮人の子供も一緒にいたことで少年の主人公はトルコ人の誘いを拒否してしまう。主人公は、トルコ人ともっと関わりたいと思いつつも、主人公の中にある「朝鮮人を馬鹿にして暮している」³⁵⁾意識が、トルコ人との関わりを断絶させてしまう。トルコ人と少年の主人公はこのように特別な因縁をもった関係であったのだが、このトルコ人が大東亜戦争(小説まま)になってから日本人によって追い出されてしまったのである。追い出された原因は、トルコ人が植民地支配の均衡を崩す存在だったからである。

主人公がこのような告白をするのは、済南において惨敗兵となったことで自分も追い出される立場になり、トルコ人の立場をはじめて体恤することができたからである。引揚げることは、つまり中国から追い出されることを意味しており、主人公は戦争に負けたことで自分の意思とは無関係に中国から追い出されるのである。

主人公はトルコ人が町をでていくところを実際に見たわけではない。おそらくスンギーから聞き、スンギーの話をもとにイメージ化している。重要なのは、そのイメージ化している場所が中国の済南だということである。済南は主人公の戦争認識の完成地である。

植民地朝鮮から中国済南にいたるまでの一連の場所で、主人公は戦争認識を形成していった。そして戦争認識が完成したときに、トルコ人と自分の関係を自覚したのである。トルコ人と自分自身は実は同じ立場であり、先行研究でも言及されている³⁶⁾ように、植民地朝鮮においてはトルコ人も日本人も外部からの侵入者であり、部外者という事実である。部外者という認識は実はここではじめて持った認識ではない。少年期にも朝鮮において自分自身が部外者ではないかという疑問をもっていた³⁷⁾。しかし、それは曖昧で実体をともなうことはなかった。主人公は、植民地朝鮮において自分自身が部外者であったと認識するまでに、東京-朝鮮-済南という場所を通過しなければならなかったのである。

35) 小林勝(1975) 前掲書、p.23

36) 吳美姪(2011) 前論文 p.329、「조선인에게 일본인도 터키인도 없는 상황이야말로 원래 자연스러운 상황이었고, 터키인도 일본인도 조선의 ‘국외자(部外者)’였다고 하는 자각이다(朝鮮人にとって日本人もトルコ人もいない状況ことこそ本来の自然な状況であり、トルコ人も日本人も朝鮮の「部外者」という自覚である。)」(訳は引用者による)

37) 小林勝(1975) 前掲書、p.25、「しかしぼくは自分が何か特別な部外者であることを漠然と感じつけていた」

済南から始まり済南に終わる各場所が持つ意味について考察してきたが、場所の移動によって主人公の戦争認識が変化し、さらに主人公の植民地認識を変化させたことが見えてきた。場所の移動は、いろいろな層の主人公を見せてくれている。

まず、少年期の朝鮮では、強い日本と戦争をカッコいいものと認識する姿、東京ではその戦争認識が偽物であり、真実は権力によって作られた似非のものだったこと、そして国という権力に追い詰められることによって、戦争とは権力の支配であることを認識、そして自分自身も植民地朝鮮では支配者の立場だったこと、再訪した朝鮮では、これを確信し、済南では、戦争を実体験し敗戦を経験することで、植民地朝鮮では自分自身も部外者であり、権力による支配は不可能であることを自覚する、とまとめることができる。

これらを踏まえると、この小説の場所の構成は、場所の移動を通して、イメージ化された戦争から戦争の実体に近づいていく構成といえるのである。そして、主人公を通して、戦争認識を回復していく姿を見ることができる作品なのである。

戦争認識の回復という立場から、この小説が1956年に発表されたことに注目してみたい。この小説は1945年敗戦後の済南から〈回想〉されているのであるが、一方で1956年からアジア・太平洋戦争を〈回想〉している作品である。

10年という時間の中に、日本の姿は大きく変わり、類を見ないスピードで戦後の復興がおこなわれていった。この時期にあえて戦争を回想させるのは、10年の間に日本の戦争認識が変化したからである。惨敗兵を登場させることで、日本は戦争に敗けたということを回帰させることはできる。しかし、この時点からの回想の効果はそれだけではない。経済復興にばかりに光があてられ、たった10年前の戦争を封印しようとする日本に対して、この小説はアジア・太平洋戦争の戦争認識を突きつけているのである。

朝鮮において1950年に朝鮮戦争が勃発し、日本はその特需により復興の足掛かりをつかみ、6年後の1956年、日本は復興した姿になった。復興の足掛かりを掴んだ朝鮮戦争の場所は日本が支配していた場所である。その事実を直視せず戦後の復興が行われている現実に、惨敗兵の姿を通して警告しているのである。植民地朝鮮、内地東京、外地中国の各場所を見せることでアジア・太平洋戦争真実の姿を伝えている。それは同時に戦争認識を問いかけるものであり、惨敗兵の主人公のように戦後の日本は戦争認識を回復したのだろうかという問いかけているのである。

7. おわりに

この小説が発表された1956年は「もはや戦後ではない」戦後宣言がなされた年である。その時にあえて、小林勝が戦争を〈回想〉させているのは、アジア・太平洋戦争が終わって約10年、先の戦争に対する認識があやふやなまま、表面的には戦後の復興だけが脚光を浴び、日本を導こうとしていたからである。そのような中、植民地としていた朝鮮で戦争がおこったことで、日本の産業は朝鮮戦争のために組織され、朝鮮を攻撃する飛行機が日本の基地から飛んでいったのである。この現実には小林勝は日本が先の植民地支配に対し真剣に向き合っていないと感じていた。もちろん新しい冷戦体制の中に日本が組み込まれていったという国際的な情勢もある。しかし、小林勝にとっての朝鮮戦争とは、日本が「何のつぐないもしないうちに戦争へ手をかした³⁸⁾」ことに対する憤慨と、「故郷を破壊させられる³⁹⁾」苦痛を受けるものだった。過激な行動に出たのは、小林勝が朝鮮を思い、ただ朝鮮戦争に反対する純粋な気持ちからで、その気持ちを共産党が無視し、共産党も朝鮮に対して真剣ではないと気付いたとき、小林勝はしだいに小説という手段を通して植民地朝鮮に向き合っていたのではないだろうか。

「フォード・一九二七年」はそのような意味において、小林勝が植民地朝鮮をはじめ描いた作品として注目すべきである。この小説は朝鮮の風景では懐かしさを漂わせる豊かな表現がなされている一方で、当時の日本人たちの植民地朝鮮での生活を通して、リアルな支配者としての日本人の姿を鋭く描いている。そしてかつては支配者だった惨敗兵の主人公を登場させ、アジア・太平洋戦争が行われた場所を移動させることで、主人公の戦争認識を形成させ回復させている。その過程を通して戦後の日本にアジア・太平洋戦争に対する認識を追求しているのである。

戦後社会は、戦争を体験した人々によって復興されてきた。その一方で、戦争から立ち直れず、復興していく社会に適応できなかった人々も多く存在した。このような日本の戦後の姿に、小林勝はこの作品を通して、多くの犠牲者を出した戦争から学び取った戦争認識が活かされているのか、と疑問を投げかけているのではないだろうかと考える。

38) 小林勝(1959)「体の底のイメージ」新日本文学、p.264

39) 同上

【参考文献】

- 이원희(2001)「고바야시 마사루 문학에 나타난 식민지조선」『日語日文學研究』第38集、韓国日語日文学会
오미정(2011)「고바야시 마사루의 「포드·1927년」론 -중개는 가능한가?」『일어일문학연구』第78号、韓国日語日文学会
小林勝(1975)『小林勝全集』第1卷、白川書院
_____(1959)「体の底のイメージ」『新日本文学』
伊香俊哉(2007)『戦争の日本史22 満州事変から日中全面戦争へ』吉川弘文館
磯貝治良(1982)「原風景としての朝鮮—小林勝の前期作品」『季刊三千里春号』三千里社
内田雅克(2010)『大日本帝国の「少年」と「男性性」—少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」—』明石書店
川村湊(1997)「小林勝外伝」文芸春秋
田中宏巳(2010)『復員・引揚げの研究』新人物往來社
千政煥(2001)「1939、植民地朝鮮における読書—日帝末期の読書文化と近代的な大衆読者の再構成(I)」『研究紀要』81、日本大学文理学部人文科学研究所
崔俊鎬(2011)「고바야시 마사루의 식민지 조선 인식」『日本語文学』第48号、韓国日本語文学会
_____(2012)「小林勝『無名の旗手たち』論」『日本語文学』第58号、韓国日本語文学会
_____(2014)「戦後文学と植民地記憶」『日本語文学』第61号、韓国日本語文学会
原祐介(2014)「コメント(3)：日本人植民者の戦後文學における二重言語空間-小林勝の植民地小説と朝鮮語-」『立命館言語文化研究』25卷2号、立命館大学
吉田裕(2011)『兵士たちの戦後史』岩波書店
溝部竜(1998)「第一次山東派兵における出兵決定過程-陸軍省部と外務省の対応を中心として-」『防衛研究所戦史部年報』(1)、防衛研究所戦史部

논문투고일 : 2015년 09월 10일
심사개시일 : 2015년 09월 20일
1차 수정일 : 2015년 10월 08일
2차 수정일 : 2015년 10월 14일
게재확정일 : 2015년 10월 19일

 <要旨>

戦後日本と小林勝

- 「フォード・一九二七年」の場所の構成と戦争認識 -

本稿は、小林勝の「フォード・一九二七年」における主人公の戦争認識についての変移について考察するものである。この小説は1956年に発表され、小林勝作品の中ではじめて植民地朝鮮を題材にした作品であり、彼にとっては分岐点ともいえる作品である。

この小説は1945年後の中国済南を中心として構成されており、1930年代の植民地朝鮮、1940年代の東京、1944年の植民地朝鮮と様々な空間と場所が登場している。そしてこの場所は惨敗兵となった主人公の〈回想〉を通して移動しており、その移動は、主人公の成長過程ともいえる。しかし、その成長は15年戦争と同時平行的に行なわれ、主人公の成長過程は、戦争認識の形成と置き換えることが可能である。

特に本稿では、この場所の移動に注目をし、各場所が回想するにあたってどのような意味をなしているのかを調査した。すると、各場所は、主人公の単なる思い出というだけでなく、場所と主人公の戦争認識は密接な関係にあることが見えてきた。

Postwar Japan and Masaru Kobayashi

- The construction of the location of “Ford and 1927” and war recognition -

This article is to study the novel “Ford-1927” by Kobayashi Masaru, focusing on the protagonist’s perception changes about war. This novel, published in 1956, is the first work for Kobayashi Masaru to write about the colonised Chosun dynasty, and it is considered as a turning point for the author.

With the main background of the story being post-1945 Jinan, China, there appear various settings such as the colonised Chosun in the 1930s, Tokyo in the 1940s, and the colonised Chosun in 1944. The background of the story changes as the protagonist reminisces about the past, who is a remnant of the lost war. The changes in the setting could be considered as representation of his growth. However, the growth occurs in parallel with the 15-year-war, thus the growth process of the main character could be transferred as his perception transformation of the war.

In this article, we focused on the changes in the settings and researched the meanings of each backdrop that is recalled by the main character. Our research revealed that each setting is not merely the protagonist’s memory. Rather, they are closely related to the main character’s perception of the war.